

One-off sessions

歯科衛生士シンポジウム | オンデマンド動画

老年歯科における歯科衛生士のこれまでの10年、これからの10年を考える

座長:石黒 幸枝(米原市地域包括医療福祉センターふくしあ)、菅野 亜紀(東京歯科大学短期大学 歯科衛生学科)

[SY5-1] 老年歯科における歯科衛生士のこれまでの10年、これからの10年を考える～歯科衛生士力全開を目指して～

○石黒 幸枝¹ (1. 米原市地域包括医療福祉センターふくしあ)

[SY5-2] 認定歯科衛生士（老年歯科）の誕生まで

○山根 瞳¹ (1. アポロ歯科衛生士専門学校)

[SY5-3] 地域包括ケアにおける認定歯科衛生士の役割 ー途切れない歯科支援をー

○加藤 真莉¹ (1. 杉並区歯科保健医療センター)

[SY5-4] 在宅歯科医療の現場において訪問歯科衛生士に求められること

○川野 麻子¹ (1. 口腔栄養サポートチーム レインボー)

[SY5-5] 老年歯科分野の将来に向けた認定歯科衛生士の展望

○渡邊 理沙¹ (1. 医療法人静心会 桶狭間病院藤田こころケアセンター)

[SY5-CL] 総括

歯科衛生士シンポジウム | オンデマンド動画

老年歯科における歯科衛生士のこれまでの10年、これからの10年を考える

座長:石黒 幸枝(米原市地域包括医療福祉センターふくしあ)、菅野 亜紀(東京歯科大学短期大学 歯科衛生学科)

【石黒 幸枝先生略歴】

1984年：

滋賀県立総合保健専門学校歯科衛生学科 卒業

歯科診療所勤務・長浜市健康推進課臨時職員・高齢者介護施設非常勤を経て

2010年～2016年：

地域医療振興協会 地域包括ケアセンターいぶき非常勤

2015年～2019年：

湖東歯科医師会 在宅歯科医療連携室非常勤

2015年～：

北海道家庭医療学センター 浅井東診療所デイケアくさの川非常勤

2016年～：

地域医療振興協会 米原市地域包括医療福祉センターふくしあ非常勤

2019年～：

医療法人益歯会 成田歯科医院非常勤

日本老年歯科医学会理事

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士委員会委員

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士（在宅療養指導・口腔機能管理）（老年歯科）

【菅野 亜紀先生略歴】

1995年3月：

東邦歯科医療専門学校歯科衛生士学科卒業

2006年3月：

明星大学人文学部卒業（学士（教育学））

2010年4月：

新潟大学医歯学総合病院 歯科衛生部門勤務

2013年3月：

新潟大学大学院医歯学総合研究科博士課程修了（歯学博士）

2015年9月：

東京歯科大学歯科衛生士専門学校

東京歯科大学市川総合病院 歯科・口腔外科（兼任）

2017年4月：

東京歯科大学短期大学歯科衛生学科 講師 現在に至る

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士（老年歯科）（医科歯科連携・口腔機能管理）

日本口腔インプラント学会認定歯科衛生士

[SY5-1] 老年歯科における歯科衛生士のこれまでの10年、これからの10年を考える～歯科衛生士力全開を目指して～

○石黒 幸枝¹（1. 米原市地域包括医療福祉センターふくしあ）

[SY5-2] 認定歯科衛生士（老年歯科）の誕生まで

○山根 瞳¹（1. アポロ歯科衛生士専門学校）

- [SY5-3] 地域包括ケアにおける認定歯科衛生士の役割 ー途切れない歯科支援をー
○加藤 真莉¹ (1. 杉並区歯科保健医療センター)
- [SY5-4] 在宅歯科医療の現場において訪問歯科衛生士に求められること
○川野 麻子¹ (1. 口腔栄養サポートチーム レインボー)
- [SY5-5] 老年歯科分野の将来に向けた認定歯科衛生士の展望
○渡邊 理沙¹ (1. 医療法人静心会 桶狭間病院藤田こころケアセンター)
- [SY5-CL] 総括

[SY5-1] 老年歯科における歯科衛生士のこれまでの10年、これからの10年 を考える～歯科衛生士力全開を目指して～

○石黒 幸枝¹ (1. 米原市地域包括医療福祉センターふくしあ)

【略歴】

1984年：

滋賀県立総合保健専門学校歯科衛生学科 卒業

歯科診療所勤務・長浜市健康推進課臨時職員・高齢者介護施設非常勤を経て

2010年～2016年：

地域医療振興協会 地域包括ケアセンターいぶき非常勤

2015年～2019年：

湖東歯科医師会 在宅歯科医療連携室非常勤

2015年～：

北海道家庭医療学センター 浅井東診療所デイクアくさの川非常勤

2016年～：

地域医療振興協会 米原市地域包括医療福祉センターふくしあ非常勤

2019年～：

医療法人益歯会 成田歯科医院非常勤

日本老年歯科医学会理事

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士委員会委員

日本歯科衛生士会認定歯科衛生士（在宅療養指導・口腔機能管理）（老年歯科）

学会設立30周年記念大会における歯科衛生士シンポジウムは、老年歯科分野の認定歯科衛生士が誕生して10年目の節目ともなるため、この分野の歯科衛生士の活動を振り返るとともに今後のさらなる発展を目指すことを目的に企画した。本学会誌第34巻第1号で山根源之先生がお示されたように、2007年（第18回学術大会）から歯科衛生士対象のシンポジウムが始まり、2010年に老年歯科分野の認定歯科衛生士が誕生した。この認定歯科衛生士制度は、審査機関は本学会であるが、認定機関は日本歯科衛生士会となり両会の協力のもと運営されている。さらに認定更新は、多職種連携を必要とする分野であるため、職能団体の生涯研修を受講し知識を高めるとともに、専門学会である本学会において活動することで可能となっている。

その認定歯科衛生士を主として構成された本学会の歯科衛生士関連委員会は、学術大会におけるシンポジウム、交流会、主催セミナー等を企画・運営している。可能な限り会員のニーズを反映した活動を進めていくために、昨年 Webによるアンケート調査を本学会の歯科衛生士会員547名を対象に実施した。回答者数163名（回答率約30%）から自由記載の項目で貴重な意見が多数あがったため、本シンポジウムの冒頭で概要を報告する。

今回のシンポジウムでは、歯科衛生士関連委員会の発足時より支えてくださった山根瞳先生から老年歯科分野における歯科衛生士に期待することをご講演いただく。さらに、全国で活躍中の認定歯科衛生士3名からは、それぞれの現場での活動および今後の展望を発表していただき、会場の皆さんと老年歯科医学分野の歯科衛生士の未来をディスカッションする機会としたい。（COI開示：なし）

[SY5-2] 認定歯科衛生士（老年歯科）の誕生まで

○山根 瞳¹ (1. アポロ歯科衛生士専門学校)

【略歴】

1970年：

東京歯科大学卒業

1974年：

東京歯科大学大学院修了（歯学博士）

東京歯科大学講師（病理学講座）

アポロ学園歯科衛生士学校講師

1981年：

今尾歯科医院勤務

1981年：

東京都養育院非常勤医員

1986年：

アポロ学園歯科衛生士学校校長

(現アポロ歯科衛生士専門学校)

1986年9月13日、東京・市ヶ谷の日本大学会館で日本老年歯科医学研究会が設立総会を開催した。参加者は約400名、その中に歯科衛生士が何名いたかはわからない。

それから4年後の1990年、日本老年歯科医学会として再出発したときの理事会に、歯科衛生士・看護婦等の入会を促すために学会費の軽減しようという案件が提案された。しかし職種は違っても老年歯科を担う会員としての立場は同じであり、将来同じ立場で発言するためにも会費は同額がよいとこの提案は却下された。そんな危惧にもかかわらず、歯科衛生士の学会参加者は順調に伸び、第8回大会（1997年）の参加者944名のうち歯科衛生士・医療関係者は177名となった。

1999年には介護関連委員会の中に「口腔ケア委員会」が発足し、翌年から学会誌に「口腔ケアシリーズ」の掲載が始まった。委員は歯科医師のみであったが書き手は歯科衛生士、看護婦であった。2002年本学会の目的達成のために必要な事業として「オーラルケアに関する周知活動」が取りあげられ、歯科衛生士の評議員がはじめて推薦された。2004年常任理事に歯科衛生士担当が決まり、認定医・認定歯科衛生士制度の導入を検討しはじめた。この頃個人会員1797名中82名が歯科衛生士であった。

2006年の大会で、「介護保険と歯科衛生士」のタイトルで、その頃歯科界がどう対応するか悩んでいた介護保険について歯科衛生士がコーディネータ、シンポジストとして登壇するシンポジウムが開催された。その後、歯科衛生士を対象とするシンポジウムが大会ごとに開催されるようになった。

どのような認定制度にするか他学会とも比較検討し、認定看護師をモデルとして、本学会が推薦し日本歯科衛生士会が認定することとした。2008年から歯科衛生士関連委員会の委員8名中5名が歯科衛生士となり、専門審査の準備が始まった。

2010年6月の定時総会で認定歯科衛生士専門審査制度が承認され、8月歯科衛生士関連委員会の歯科衛生士5名が最初の認定歯科衛生士となった。同年12月12日、歯科衛生士関連委員会による認定衛生士専門審査が日本歯科大学で実施され、翌年1月日本歯科衛生士会の認定委員会を経て50名の「認定歯科衛生士（老年歯科）」が誕生した。50名という数字は会員の歯科衛生士がどれだけ待ち望んでいたかがわかる数字である。

そして10年、「認定歯科衛生士（老年歯科）」をどう活かすかをもう一度考えて欲しい。

（COI開示:無し）

[SY5-3] 地域包括ケアにおける認定歯科衛生士の役割 ― 途切れない歯科支援を―

○加藤 真莉¹ (1. 杉並区歯科保健医療センター)

【略歴】

日本医歯薬専門学校歯科衛生士科 卒業

2012年：

杉並区歯科保健医療センター勤務

2014年：

杉並区歯科保健医療センター主任歯科衛生士

2016年：

老年歯科医学会認定歯科衛生士 取得

2018年：

障害者歯科学会認定歯科衛生士 取得

勤務地である杉並区歯科保健医療センターは、杉並区歯科医師会立の医療機関として一般の歯科受診が困難な障害者・高齢者・有病者を対象に外来・訪問診療を行っている。歯科医師会との知識や技術、診療情報の共有及び、行政との連携も重要な役割である。そのため、従事する歯科衛生士には、障害・疾病・老年期等に関する専門知識、対応技術に加え、連携を円滑に進めるためのコーディネート力も求められる。

訪問診療開始から9年が経過し、在宅訪問は月平均213件、さらに施設訪問、病院連携、歯科衛生士による居宅療養管理指導を行う拠点「口腔ケアステーション」の設置など、老年分野における業務拡大は著しい。また口腔ケア・機能への関心の深化、ニーズの増加を受け、区民・多職種向け講演会の実施等、歯科衛生士が主体となる活動の場も増加した。

そのような環境下において感じた「自信をもって患者さんと向き合いたい」という思いが認定歯科衛生士を目指したきっかけである。認定資格の取得は、患者対応だけでなく多職種連携や講演など対外的な活動においても、自らの専門性を示す客観的評価として自信につながった。また、学び続けるモチベーションの基盤となっている点も有意義であったと考える。

要介護高齢者を支えるためには各職種と分野を超え連携することが大切であり、口腔にとどまらず全身、生活へと見通せる広い視野が求められる。そして歯科衛生士は患者、家族の身近な支援者として、歯科と多職種をつなぐ役割を果たす。しかし介護現場の専門職として働く歯科衛生士の数は増えつつあるものの、その知名度は未だ十分でない。

また介護現場では、う蝕や歯周病が重症化し汚染された口腔や、摂食嚥下機能が著しく低下した状況を目にする機会も多く、何らかの理由により歯科の介入が途切れてしまう要介護高齢者の現状が窺える。歯科衛生士が役割を果たすことにより、高齢化、疾病の進行、生活動態に合わせた途切れない支援をしていくことが、これからの10年に抱く展望である。

本シンポジウムでは、歯科衛生士が口腔健康管理の専門職として周知され、地域包括ケアの重要な職種として活躍できるように、認定歯科衛生士取得の意義とともに考えてみたい。また歯科衛生士が各々の立場で察知したニーズを継続した支援につなげていくためには何が必要であるか、歯科医師会立の診療機関で働く認定歯科衛生士の役割を再考する機会としたい。

(COI開示なし)

[SY5-4] 在宅歯科医療の現場において訪問歯科衛生士に求められること

○川野 麻子¹ (1. 口腔栄養サポートチーム レインボー)

【略歴】

1992年：

実践女子大学 文学部美学美術史学科 卒業

2012年：

アポロ歯科衛生士専門学校 卒業

2012年～2017年：

都内 歯科診療所 勤務

訪問診療に従事

2017年：

口腔栄養サポートチーム レインボー 参加

口腔栄養サポートチーム レインボーは、フリーランスの歯科衛生士と管理栄養士の2職種からなる“食を支えるグループ”である。①居宅療養管理指導（訪問衛生指導）による訪問活動、②介護者への支援、③口腔健康管理の必要性とその方法、および適切な栄養摂取の必要性などの啓発活動、という3点を主な軸として日々活動に励んでいる。

レインボー所属の歯科衛生士は地域の複数の歯科医院と非常勤雇用契約を結び、歯科医師の指示のもと患者宅を訪問している。この訪問活動の中、フリーランスの強みを生かし、在宅療養者やその家族の声に耳を傾けてより深く生活に寄り添うことが、歯科衛生士としてのやりがいにつながっている。

食べる楽しみ、コミュニケーションの維持は在宅療養者にとって、生きる意欲に直結しQOL向上に大きな影響を及ぼしている。また、たとえ口から食べられなくなっても、歯科治療が困難になっても、最期を迎える時まで口腔環境を良好な状態を保つことがその人の尊厳を守ることになる。昨今、口腔健康管理の観点から、食支援を担う医科・歯科・介護との多職種連携協働の必要性は高まっている。

老年歯科分野に携わる歯科衛生士には歯科の知識はもちろんのこと、全身疾患の知識および要介護高齢者の生活を診る視点を持つことが求められる。今回のシンポジウムでは深く関わってきた在宅療養者やその家族から受け止めてきた不安や要望をお示しする。また、他職種と連携協働することで歯科と医科、介護との架け橋になる訪問歯科衛生士の可能性をお伝えしたい。

今回のシンポジウムを通じ、在宅療養生活を支えるチームの一員としての歯科衛生士の存在意義を考えるきっかけになれば幸いである。(COI 開示なし)

[SY5-5] 老年歯科分野の将来に向けた認定歯科衛生士の展望

○渡邊 理沙¹ (1. 医療法人静心会 桶狭間病院藤田こころケアセンター)

【略歴】

2006年：

専門学校 宮城高等歯科衛生士学院 卒業

2006年：

藤田保健衛生大学病院（現 藤田医科大学病院）歯科口腔外科 常勤

2017年：

東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野 入学

2017年：

前田デンタルクリニック 非常勤

2019年：

医療法人静心会 桶狭間病院藤田こころケアセンター歯科 常勤

2019年：

朝日大学歯学部口腔病態医学講座 障害者歯科学分野 非常勤助教

一般社団法人 日本老年歯科医学会 代議員

公益社団法人 日本歯科衛生士会 認定分野B老年歯科認定歯科衛生士

一般社団法人 日本摂食嚥下リハビリテーション学会 評議員・認定士

歯科衛生士の国家資格を取得して14年になる。歯科衛生士を目指した当時、すでに少子高齢化は社会問題として提起されており、超高齢社会へと進展した。この間、医療・介護・福祉など多岐に役割が見出され、歯科医療は多様に変化を重ねてきた。それらは歯科衛生士の需要の広がりにも結びついていると感じている。

歯科衛生士を志望し、1年でも多く学生生活を送りたいという単純な動機で、当時は少数だった3年制の養成校を選択したが、そこでの教育内容は国家試験合格へ向けたものに加えて、超高齢社会で適応する人材になるためのカリキュラムが編成されており、それらの講義をきっかけに摂食嚥下障害に興味を持った。その興味は、“今後間違いなく増加する摂食嚥下障害患者に対応できる歯科衛生士になる！”という想いに発展し、研鑽できる環境を就職先に選択した。結果的に摂食嚥下障害に限定せず、急性期医療に関連する全身疾患の病態や治療・薬剤などの知識を得て、医療機関における疾患発症時から終末期に至る対応を経験した。日常臨床が、疾患や障害を有する老年期に該当する患者への対応が多く、その専門性と特化した知識を、指導的に発信する根拠となるものが必要だと考え、本学会の認定歯科衛生士を取得するに至った。

認定取得によって就業先の評価に反映されたことや、自信がついたことは個人的なメリットであった。しかし実状は、認定取得の有無による明瞭な境界がないため、認定歯科衛生士の質の担保が急務なのではないかと思う。自らの存在効果を打ち出していくことは、老年歯科分野の歯科衛生士の専門性の構築に直結するだろうし、そのためには診療だけに留めず研究レベルで見出すことが必要になる。それらを先導切って行う立場が、すでに認定を取得している我々であると思う。また、この分野に関する、より多くの知識を有しているのならば、指導者としての役割を担う必要もあり、卒前・後いずれにも教育的に還元することが、10年先への希望を作り出すことに直結するのだろうと考える。

本シンポジウムでは、演者の認定取得後の役割や日常のやりがいを提示し、一方で課題の先にある展望について、共有する場にしたいと考えている。

（COI開示：なし）

[SY5-CL] 総括